

## 祈り続ける

目をさまして、感謝のうちに祈り、ひたすら祈り続けなさい。(コロサイ 4:2)

パウロの手紙のごく一節なのですが、働き人聖研の中でこの一節だけが語られていたので、何度もなんども読んで覚えてしまいました。そして覚えてしまうほどになって、ほんの短い一節になんとなんと多くのことが語られているのかと、あらためて驚いています。

「目をさまして祈る」とは、どういうことでしょうか。目をさまさないで祈る祈りというものがあるのでしょうか。目をさまして祈り眠っている祈り。もしそんな祈りがあるとしたら、神の願いに目を向けている祈りとそうでない祈り。肉の祈りと霊の祈り。

神の願いが成るように願う祈りと、自分の願いだけが成ることを願う祈り、ということでしょうか。

「感謝のうちに祈る」人が主に向かって祈る時は、いつもうれしい時ばかりではないことでしょうか。苦しい時、つらい時、追いつめられた時、なんとか助けてほしい時。祈りにはむしろ苦しい時の祈りの方が多いのではないかと思います。

しかしパウロは「感謝のうちに祈りなさい」と言います。苦しいことも痛いことも、今の困難も行きづまりも、ことごとくが「感謝」だということです。これは難しい。

神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている。(ローマ 8:28)

万事が益となると言います。万事、すべて、一つの例外もなしですよ。あれがなければ、私の人生はハッピーなのに、というのがふつうの考え方です。しかし、傷つけられたことも、愛する人を失ったことも、自分の病いも、死も、すべてが益となると確信しているのです。

十字架があるから。十字架の絶対の愛とゆるしをパウロは知っていたからです。私は、十字架につけられたキリストしか知るまいと決断したパウロです。これ以外、ほんとに知る必要がなかったのです。

「ひたすら」祈れ。ひたすらとは、熱心にうむことなくということです。これはがむしゃらにというのではなく、主だけを見て、主から目を離さないで祈りなさい。それは、十字架から目を離すなということです。そしてパウロは、「ひたすら祈り続けなさい」と言って「祈り続ける」ことを勧めます。

祈ることと、祈り続けることは違う。一瞬信じたことは、信じ続けることとは違う。一瞬だけなら、すぐに信じなくなることもできる。それは信じることではない。

祈るとは、祈り続けること。思いつきで、ほんのちょっとした時間だけ祈ることもあるでしょう。しかし祈り続けることは、信仰なしにはできないものです。祈りながら不安がわいてくることもある。疑いすら持ってしまう。怒りが出てくるかもしれない。信じて祈り続けることは、信仰そのものなのです。

揺れることもなく、疑いも全くなしに完全に「祈り続ける」ことのできる方は、主だけです。しかし、人は主の十字架によって誰もが祈り続けることができる者にされているのだと思います。それは十字架を忘れなければ、私たちは祈り続けることができるということです。

ところで矛盾するような言い方をしていますが、主はすべてのすべてを知って下さっている神ですから、主に祈るのは一瞬でも、十時間でも、ほんとは変わらないはずですよ。口に出さなくても出せなくても、祈らないうちから、主は祈りを聞いて下さっているからです。

それを知っているパウロが、どうしてひたすら祈り続けなさいと言うのでしょうか。ひたすら祈り続ける姿勢によって祈り続けることによってこそ成る、いや成りやすいことがあるからでしょう。それは何なのか。

私は「キリストのからだ」だと思います。パウロは、一人一人の、キリストの十字架を見る信仰が、一瞬見るのではなく見続ける信仰となる時、キリストのからだを作られることを信じていたのだと思います。祈り続けることは、肉の介入を少しでも防ぐでしょう。まあまあ祈るのではなく、ひたすら祈ることは、キリストに目を向けさせるでしょう。キリストを見続けることによって、肉は切られ続けるからです。キリストの十字架の現れは、キリストのからだなのです。

パウロの言葉はどこをとっても、十字架につけられたキリストしか知るまいという決断と、キリストのからだを目指す願いが見えるのです。

パウロが願い、見たものが、風の教会に成る時が来たことを信じます。

目をさまして、感謝のうちに祈り、ひたすら祈り続けなさい。